

大仏餅。袴着の祝。新まへの盲目乞食

三遊亭円朝

青空文庫



このたびはソノ三題話の流行つた時分に出来ました落語で、  
 第一が大仏餅、次が袴着の祝、乞食、と云ふ三題話を、  
 掲載することに致しました。

場所は山下の雁鍋の少し先に、曲る横丁があります。  
 彼の辺に明治の初年まで遺つて居つた、大仏餅と云ふ餅屋があ  
 りました。余り美味しくはございませんが、東京見物に来る  
 他県の方々が、故郷へ土産に持つて往つたものと見えます。  
 そのだいぶつもちや其大仏餅屋の一軒おいて隣家が、表が細い柵の面取りの出格  
 子になつて居りまして六尺、隣りの方が粗い格子で其又側が  
 九尺ばかりチヨイと板塀になつて居る、無職業家でございま

する。表には河合金兵衛といふ標札が打つてござります。マア  
かねかし おもて かはひきんべゑ へうさつ 札が打つてござります。マア  
金貸でもして居るか、と想像致されます家、丁度明治三年  
の十一月の十五日、霏々と日暮から降出して来ました雪が、追  
ひくつも すゑ も はつゆき すゑめ 々と積りまして、末には最う「初雪やせめて雀の三里まで」  
どころではない雀が首つたけになるほど雪が積りました。其時  
にはかめくら こじき ほそたけ つゑ つ とし ころ に俄盲目の乞食と見えまして、細竹の を突いて年齢の頃は  
彼 かれ これ 是五十四五でもあらうかといふ男、見る影もない襤褸の扮装  
で、何うして負傷を致しましたか、尻を端折つて居る膝の所から  
ダラ／＼血が流れて居ります。ト属いて来ましたる子供が、五  
歳か六歳位で色白の、一二重瞼の可愛らしい子でございます  
るが、生来からの乞食でもありませんまいが、世の中の開明に伴

れて、前ぜん、贅ぜい沢生計たくらしをなすつたお方かたといふものは、何どうも零落おちぶれ  
 易やすいもので。親父おやちの膝ひざから、血ちが流ながれるのを視みて、子こ「お父とつちや  
 ん痛いたいかえ、お父とつちやん痛いたいかえ。父ちち「アイそれは痛いたいワ……負け  
 傷がをしたんだから……エー最もう新しん入まいの乞食こじきだからの、何ど処こが何ど  
 うだかさつぱり訳わけが解わからないが、彼あの山や下ましたの突つき当あたりの角かどの所ところ  
 に大勢おほぜい乞食こじきが居あて、何故なぜ己おれたち等の繩張なはばりの家うちを貫もらつて歩あく、其そ  
 こおれは己ほうの方さたで沙汰さたをしなれば、貫もらふところでない、といふから、  
 わたくししんまい私わたしは新入こじきの乞食なで何なんんにも存ぞんじませぬ、と云いふのを、大勢おほぜい寄よ  
 つて集たかつて己おれを三さんつも四よつも打ぶち倒のめしアがつて、揚句あげくのはてに突つ  
 飛きばされたが、悪わるいところに石いしがあつたので、膝ひざを摺すり剥むいて血ちが  
 大層たいそう出でるから……。子こ「お父とつちやん血ちが大層たいそう出でるよ。父

「アー大層出るか。子「アー大層流れるからね……あのね坊  
が摩すつて上げようか。父「まあまあ何しろ斯う歇みなしに雪が  
降つては為方がない、此家の檐下を拝借しようか……エー  
最う日が暮れたからな、尚ほ一倍北風が身に染むやうだ、坊  
は寒くはないか。子「あいお父ちゃん、坊は寒くはないけれども、  
お父ちゃん痛からうと思つて……。父「ン、ンー能く労つて呉  
れるの。子「お父ちゃん摩つて上げようか。父「ンー摩つて呉れ。  
子「此処のところかえ……。父「あゝ……。有難うよ……。何うも  
ピリ／＼痛んで堪らない……。深く切つたと見えて血が止まらない  
……モシ少々お願ひがございませうがな、お軒下を少々拝  
借致します……。就きまして私は新入の乞食でございまして唯

今いま其そ処こでころ転ころびましてな、足あしをすりこ摺すり破こしまして血ちが出て困ります  
 が、お慈な悲なにさ何ど卒うお煙た草ばのこ粉な末なでも少せう々く頂いたきたいなもので……工  
 一い粉こな末なで宜よいのでございますがな。此う家ちではき賓やく客くのか帰へつたあ後と  
 と見あえるまして、主ある人じが店みを片か付たけさせて指さ図し致づして居をりますとこ  
 ろへ、表おもてて表こから声こゑを掛かけますから、主な「何なんだ……お美み那なや何な者にか  
 表おもてて言いつてるぜ。み「なしんにまいね新こ入じの乞ま食あが参まりまして、ソソノ負け  
 傷がをたしたばからお煙た草ばの粉こな末なを頂いたきたいな……。主な「然さうか、乞こ  
 食じか……待まちなく、今いま乃お公れが見みて遣やるから……。と雨あ戸まを引ひ  
 て外かの格かう子しをがらがらツと明あけまして燈あ明かりを差さ出して見みると、見  
 る影かげもない汚きた穢ない乞こ食じの老お爺やが、膝ひのさ下したからダダラ／＼血ちの出る  
 所おをさ押おへて居あると、僅わかわ五い歳つか六む歳つぐららるの乞こ食じの児こが、紅も葉みの

やうな可愛らしい手を出して、父親の足を摩つて居ります。

主「おゝくゝ……お美那、可愛想ぢやアないか……見なよ……

……人品の好可愛らしい子供だが、生来からの乞食でもあるま

いがの……あれまア親父が負傷をしたといふので、彼の可愛らし

い手を出して膝の下を撫て遣つて居る、あゝくゝ可愛い児だ、今

のう良い薬を遣るよ、……煙草の粉末ぢやア却つて可けない、良

い薬が有るから……お美那や其粉薬を出して遣んな……此薬は

他にない能く効く薬だから……血止めには善く効くし、直ぐに

痛が去るから、此薬を遣るから此方へ足を出しな。乞「はいくゝ

有難うございます、誠にお檐下を拝借するばかりでも、

私是有難いと存じますのに、又々お強請申して、お煙草の粉

末を願ひましたところ、却つてお薬を下されまして、はい有難  
 う存じます、誠にとんだ負傷を致しまして……何うも相済みませ  
 ぬことでございます、お蔭様で父子の者が助かります、はい／  
 ……。主「さア、此薬をおつけ……此薬はな鎧の袖というて、  
 なかく、売買にない良い薬だ……ちよいと其処へ足をお出し、  
 撒けて遣るから……。乞「はい、有難う存じます。主「それ／  
 ……染みるか、……あと、余つたのをお前に上げるから此薬を  
 持つてお帰り。乞「はい。主「エー、まア血が大層流れるが、  
 手で拭で縛らなければいけない。乞「はい。主「手拭は無  
 いか、……無ければ遣る……これ、古手拭を出して遣んな、  
 ……ソレ此手拭で縛るが宜い、アレサ然う裂かなくつても宜いや

な、……無ければ復た古い手拭を遣るよ……。乞「はいく有難う存じます。」

にはかめくら 俄盲目で感が悪るいけれども、貰つた手拭で傷を二重ばかり

り巻いて、ギョツと堅く緊めますと、薬の効能か疼痛がバツタ

り止まりました。乞「旦那様、誠にまア結構な薬でございます。

す、有難う存じます、疼痛がバツタり去りましてございます。

主「それは去るよ、極く効く薬だもの……其の子はお前の子かえ。

乞「はい悴でございます。主「幾歳になる。乞「はい六歳に

なります。主「六歳か……吾家の子供は、袴着の祝日で今日は

賓客を招んで、八百膳の料理で御馳走したが、ヤア彼れが忌嫌だ

の是が忌嫌だのと、我意ばかり云ふのに、僅か六歳でありながら

おやかうかう  
 親孝行に、まア此寒いのに可愛い手で足を撫て、遣るところ  
 は何うだえ、……可愛想だなー、……彼の残余つた料理があつ  
 たツけ……賓客の残した料理が皿の内に取つてあるだらう、……  
 アーそれさ、……乃公の家で今日は小供の袴着の祝宴があつて、  
 今賓客が帰つたが少しばかり料理の残余つたものがあるが、それ  
 をお前に上げたいから、なにか麴桶か何かあるか、……麴桶  
 があるなら出しな。乞「はいく、まア結構なお薬を頂くのみ  
 ならず、お料理の残余物まで下され、有難う存じます、左様  
 ならこれへ頂戴致しますと、檻褸手拭へ包んであつた麴桶  
 を取出して、河合金兵衛の前へ突出すのを、金兵衛手に取つて見  
 ますると、遠州所持の南蛮砂張の建水でございます。主

「まあお前、結構な建水だが此建水をお前は、何か麴桶の代りに使ふのか。乞「はい最う何にも彼も売り尽しましたが、此品は私の秘蔵でございますから、此品だけは何うも売却することがイヤでございますから、只今もつて麴桶代りに傍離さずに使つて居ります。主「ソ、これは恐入つたね、お前はお茶人だね、あゝこれく彼の悪い膳に、……向う付肴が残余つて居るのを附けて、お汁を附けてチヨツと会席風にして……乃公もね茶道が嗜きだからね、お前が何うも麴桶代りに砂張の建水を持つて居るので感心したから、残余肴だが参州味噌のお汁もあるから、チヨツと膳で御飯を上げたい、さア家内へ上つてね、何もないホンの残余肴だが御飯も喫べて下さい、さア

此処へお入り…。乞「へい〜…。何う致しまして、此通り穢  
 うございますから…。主「まあ宜いよ〜…。此処を明けて置  
 いては、雪が吹ツ込むから疾く此処へお入り、…。乃公が寒いか  
 ら…。乞「へい〜有難う存じます、何うも折角のお厚情  
 でございますから、御遠慮申上ませぬで一言葉に従つて、  
 御免を蒙ります。主「どうもお人品なことだ、違ふのうー…。  
 さア〜此方へお入り。乞「へい〜。主「足が汚れて居るな…。  
 …これ〜徳次郎〜。徳「はい。主「此処へ来ての、此乞  
 食の足を洗つて遣れ。徳「乞食の足イ…。シー〜。主  
 「何を云つて居る、当時は事由あつて零落れてお出でなさるが、  
 以前は立派なお方で、士族さんだか何だか知れないんだよ、大事

にしてお上げ、陰徳いんとくになるから。徳とく「こゝろ（小声）陰徳いんとくでも乞食こじきの足を洗ふのは忌嫌いやでございますなア。とグヅ〜云いひながら、忌嫌いや々々足を洗つて遣る。乞食こじきは頻しきりに礼れいを云いひながら雑巾ざふきんで足を拭ぬぐひ、漸やう〜の事ことで板いたの間まへ坐すわつて、乞こ「どうも何なにから何なにまでお厚情なまげに預あづかりまして、有あり難がたう存ぞんじます。主ま「これ〜膳ぜんを持もつて来きな……お汗あせを熱あつくして遣やるが宜いい……さア〜お喫たべ〜  
あまりもの 剩余物あまりものではあるが、此品これは八百膳やほぜんの料理れうりだから、そんなに不味まずいことはない、お喫あがり〜。乞こ「へい〜有あり難がたう存ぞんじます……  
やほぜん（泣きながら伴まへに向つて）まア八百膳やほぜんの御料理おれうりなぞを戴いたきま  
これすといふのは、是こゝはお前まへなんぞはのう、喫たべ初はじめの喫たべ納をさめだ、  
なさはるか斯かういふお慈悲なさはるか深い旦だんなさま那樣まがおりなさるから、八百膳やほぜんの料理れうり

を無宿者やどなしに下くだされるのだ、お礼れいを申まうして戴いたげよ、お膳ぜんで戴いたぐことは、最もう汝きさま生ま涯やう出来いないぞ。子こ「あい……旦だんなさま那樣やうお有あり難がたうございます。と可愛かあいらしい手てを突ついて、頸くびを横よこにして挨あい拶さつをします挙動やうすが手ての突つきやうから、辞儀じぎの仕方しかたがなかく、叮てい嚀いでげず。主まへさん「ノー……お前まへ様さんも何なんだらうね……。乞こ「へい」。主いぜん「以前いぜんは然しかるべきお方かたの成なれの果はてで、まア此この時じ節せつが斯かう変かはつたから、当いま時ま然さういふ御身ごみぶん分に零落おちぶれなかつたのだらうが、何どうもお氣きの毒どくなことで……。乞こ「はい旦だんなさま那樣やう私もわたしも、賓客きやくを招よぶ時ときには八百膳やほぜんの仕出しだしを取寄とりよせまして、今日けふの向付むかうづけ肴あますが甘酢かげんの加減かへんが甘味あます過ぎたとか、汗あせが濃過こすぎたとか、溜たまり漬づけが辛過からすぎたとか小言こごとを云いつた身みぶん分ぶんでございいますが、当いま時ま罰ばちが中あたつて斯かういふ身みぶん分ぶんに

おちぶおちぶ 零落れ、にはかめくら 俄盲目になりました、可愛かあいさう想なのは此このこそぞう子供でござ

います、何なんにも存ぞんじませぬで、親おやの因いんぐわ果めぐが子こにりまして、

此このゆき雪ふの降なかる中はだしを跣はだし足はだしで歩わたくしきまして、私わたくしが負けが傷がを致いたしますとお父とつ

さん痛いたうないかと云いつて勞いたはつて呉くれます、私わたくしの心こころ得えちが違ちがひから斯か

やうやうれいらくいたくいた様に零落いたを致いたし、目めまで潰つぶれまして、ソなノ何なんにも知らぬ頑ぐわん是ぜ

のない忤せがれに、斯かう難なん義ぎをさせますかと思おもひますれば、誠まことにお恥はづか

しいことことでござごいます。主ま「それはくお氣きの毒どくなことだ、貴方あなた

は以前もとはお旗はた下もとかね。乞こ「いえく。主ま「ソなんー……南蛮なんばん砂張すばり

の建みづこほし水ほしは、是これ品あんなは遠州ゑんしゅうの箱書はこがきではないかえ。乞こ「へい…

…能よう御存ごぞんじさまでござごいます、これは貴方あなた、遠州ゑんしゅう所持しよぢでござ

いまして、其その後ちたい大えらした偉えらい宗そう匠しやうさんが用もちひたといふ品しなでござ

ございます。主「ノー……」。乞「これは私の大事な品でございまして、当時斯う零落れまして、値を高く買はうといふ人がございませけれども、なか／＼手離しませぬで……。主「どうもマア、乞食になつても砂張の建水をすてないといふところは、真のお茶道人でげすな、お流儀は……」。乞「へい千家でございませぬ。主「誰方の御門人で……。乞「はい実は……川上宗治の弟子でございませぬ。主「フーン……」。お姓名は聴いても仰やるまいね。乞「へい／＼もう姓名を申すのは、お恥かしくて申せませぬが、斯様に御親切に上へ上げて、御飯まで下さる貴方様のことでございませぬから、隠さず申上げますが、私は芝片門前に居りました、神谷幸右衛門でございませぬ。主「へえ……。何にかえ、貴方は神

みかう  
 幸といふ立派な御用達で大したお生計をなすつたお方か……  
 えーまあどうも思ひ掛けないことだねえ、貴方の家宅の三畳大目  
 の、お数寄屋が出来た時に、お席開きといふので、私もお招き  
 あづか  
 に預つたが、其時は是非伊豆屋さんなんぞと一緒に、参席る積  
 りでございましたが、残念な事には退引きならぬ要事があつて、  
 たうとうあが  
 到頭参席りませぬでしたが……。乞「へい、貴方は誰方様  
 で……。主「私アお徒士町に居つた、河内屋金兵衛でげすよ。乞  
 「へえー……河内屋さん……エーまあ道理こそ、此砂張の建水  
 がお目に留まるといふのは、余程お嗜好者とは存じましたが……  
 あなた  
 貴方は河内屋さんでございましたか……思ひ掛けないことで……。  
 主「どうも誠に思ひ掛けないことでお前さんに邂逅しました、未だ

お目には掛かからなかつたが、今こんど度はお眠ちかづき近きにならう……まア此こ  
のじせつ時か節はがあ変なつてな貴あなた方は斯かう御ご零れ落らくになつて、何なんとも云いひやう  
 がない、拙てまへ者はマアどうやら斯かうやら、斯かうやつて居をりますが本ほ  
んたう当ににおいとしいことだ……妻うはさ「お噂うはさには毎まい度ぢ承けたはつて居をりま  
 したよ、立り派つぱなすまひお住すまひ宅にはでかお庭にはは斯かう、何なには斯かうと、能よくなまア、何  
うはさんでございますよ、名な草くさ屋やの金きん七しちといふ道だう具ぐ屋やが参まりまして始しじう終じう  
うはさお噂うはさでございますよ。乞こ「へい然さうでございますか。主ま「まアノ  
 〱おいとしいことでございます……時ちに一寸ちよつとお薄うす茶あをあげやう  
てつびんだ鉄てつ瓶びん点だてゞ……コレ〱其その棗なつめで宜いい、出でて居あるらんで宜いいか  
もら持もつてお出いで……一ふ服く鉄てつ瓶びん点だてゞあ上あげませう、茶ちは挽ひきたて  
 だけれども、何どうも湯ゆ加か減げんがいいのでうまく出で来きないが、一ふ服く上あ

げる。乞「どうも誠に有難うございます、私は最う一生涯、

お薄茶うすぶく一服いっぱくでも戴いたゞけることではないと、断念あきらめて居をりましたところ

がなきごゑ（泣声）鉄瓶てつびん点だてゞ一服いっぱく下さるとは……往昔むかしの友誼よしみをお忘

れなく御親切ごしんせつに……私わたくしは最う死んでも宜ようございます。主「然

おおつしう仰おつしやられては実じつに胸むねが一杯いっぱいになります……お菓子なにかか何かあるだ

らう……最もう皆みな賓客きやくに持もたして遣やつてしまつたか……困なにかつたな

ア……何なにかないかなア……ンー一軒けんおいて隣家となりの大仏餅だいぶつもちでも宜よ

い、仕方しかたがない……宜よしく此餅これを皆皿みんならに積つんでの……さア何どうか

つまらぬ味あじない物ものだが子供衆こどもしうに皆みな上あげて下ください。

乞「どうも有難ありがたう存ぞんじます……左様さやうなら御遠慮ごゑんりなしに頂ちやう

戴だい致いたしますと、亭主ていしゆの河合金兵衛かはひきんべゑが茶ちやを点たつてる間に、小

并ぶりを前まへに引寄ひきよせて乞食こじきながらも、以前いぜんは名なのある神谷幸右衛門かみやかうゑもん、  
 懐ふところ中ちりから塵紙ちりがみを出だして四よつに折をつて揚子箸やうじばしで手探てさぐりで、漸や  
 うく餅もちを挟はさんで塵紙ちりがみの上うへへ載のせて倅幸せがれかうのすけ之助のすけへ渡わたして自分自分も一  
 つ取とつて、乞こ「有難ありがたう存ぞんじます……大仏餅だいぶつもちと申まうすものは雅がが  
 ありまして、お茶受ちやうけには結構けつこうなお菓子でございますなア……  
 どうも思おもひ掛がけないこと……とオ口くちく泣なきながら、口くちの中で  
 ムクムク嚙かんで居をりましたが、お茶がプツと出でて来きたから、グツ  
 と嚙のみこ込こむと餅もちが咽喉のどへ問つかへた。幸くもん「(苦悶くもん)」グツグツ。主しゅ  
 「おやくく何どうかなすツたか。幸くもん「(苦悶くもん)」グツグツ……モ  
 っ、餅もちが……。主しゅ「餅もちが問つかへたか……さア大變たいへんだ……泣なきな  
 がら喫たべるから問つかへるのだ困こつたものだ……お待まちちなさい……此このこ子こ

が心配する……私が脊を叩いて上げる……宜いかい……失礼だ  
 が叩きますよ。と握り拳で二度叩くと、グツと餅が通つたが鼻の  
 障子が抜けてしまつた。乞「フガくく……有難うほざいま  
 す有難うほざいます、餅が通りました。主「餅が通つたか……お  
 やく貴方の目が明きましたな。乞「目が明ひましたが、鼻が斯  
 んなになりました。主「何うしたんだ……どうく……ハハア解  
 つた今食つた餅が、大仏餅だから、目から鼻へ抜けたのだ。

(塙納谷直次郎速記)





# 青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 大仏餅。袴着の祝。新まへの盲目乞食

三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>